
飛翔兵器 憑代

嶋ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛翔兵器 憑代

【Nコード】

N5637V

【作者名】

嶋ヒロ

【あらすじ】

宇宙から襲来したアンノーンと呼ばれる無機生命体。それは人類を含む有機生命体すべての抹殺を目的にしていた。対抗できる唯一のものは、古代に異星人が遺した『憑代』と呼ばれる飛翔兵器。しかし搭乗できるのは、特殊な遺伝コードを持つ少年少女に限られていた。十六歳の主人公のアキラは、『憑代』を操れる資格を有していなかったのにも関わらず、戦いの渦中に巻き込まれていく。

発動

その日の昼休み、俺はユウイチと2人で校舎の屋上に寝転びながら、ぼんやりと空を眺めていた。

5月の空は、霞みがかかって青の色合いが少し薄く、どこか眠気を誘うようだった。

やがて高いところを、真っ白な憑代が編隊を組み、音もなく滑るように通り過ぎていった

「ありゃあ、最新鋭の武装だぜ」ユウイチが言った。

確かに昆虫のようにぬめりとした憑代の機体の両側には、槍のようなミサイル状の突起物が視認できた。

「ってことは、あの中に乗っているのは、強襲部隊か何かの精鋭だろうな」俺は答えた。

最近、どこかへと飛び去る憑代の姿を、頻繁に目にするようになっていた。もしかしたら、近々、どこかで大規模な戦闘が行われるのかもしれない。

「防衛空軍の精鋭と来れば、どんな不細工な奴だってモテモテだし、両親も鼻高々だし、俺等みたいな役立たずの落ちこぼれとは、まるで違った毎日を過ごしているんだろうな」ユウイチが皮肉っぽく言った。

「でも、死なないで済むさ」俺は言い返した。

「おいおい、俺達は国家公認のモルモットなんだぜ？ 宇宙で死ななくたって、きっと無茶な実験でいびり殺されるのさ。それが劣悪コード持ちの運命なんだよ」

ユウイチが言ったことは、確かに当たっているのだろう。

一昔前は、偏差値という学力テストの結果が進路や将来を大きく左右していたらしいけれど、今は、俺達の運命のすべてをATGコ

ードが司っていた。Add To Geneつまり遺伝子に作為的に加えられたコードのレベルが著しく劣る俺やユウイチのような者は、正規軍はもちろんのこと、予備軍にも入れてもらえなかった。地球滅亡の瀬戸際に役に立てることは、本当に人体実験のようなものだけだったのだ。

俺達の学校の正式名称は、『国立つくば科学研究所付属中等教育学校』という。

つくば科学研究所に隣接された全寮制の中高一貫校で、一応は学校らしく授業もテストも行われていたけれど、研究所が治験や各種人体実験で被験者を必要とする場合は、俺達が駆り出されることになっていた。

俺は気休めに言ってみた。

「戦場に駆り出されたパイロットの寿命なんて、せいぜい2、3年だろ？こっちはそこまでは短くないぜ？」

「そりゃあそうだけども、俺等だって、毎日、ヤバそうな光線の前じつと立ってろって命令されたり、変な薬を飲まされたりしてるんだぜ？ 思う程には長生きできないと思うけどな」

そう言われて俺は、腕を上げてその内側にできた痣のようなものを眺めてみた。これは一週日程前、毒々しい黄色の錠剤を飲めと強要された直後にできた水ぶくれの痕だった

どうせ死ぬのならば、もう少しましな死に方を選びたかった。俺はため息をつき、頭の後ろで腕を組んだ。

空のどこかで、ひばりが忙しそうにさえずっていた。

眠気を誘うのどかな時間を、鉄扉が開く威圧的な音が破った。

寝転びながら、屋上への出入り口の方へ首を向けてみると、そこには防衛空軍の濃紺の制服を身につけた3人の女が立っていた。襟には一目でパイロットだと視認できる憑代型のピンバッジが留めら

れていた。

「何なの？あのだらけきつた連中は？」

「制服姿なのだから、この学校の生徒に間違いないでしょうね」

女達はそう言い合いながら、俺達に怪訝そうな視線を向けていた。

「うわお、レベル高けーって、ありゃあ、もしかして、憑代のパイロットか？」ユウイチが目を見開くようにして言った。

「その者達、上官である。姿勢を正せ」3人の中で一番背が高く、金色の髪と青い瞳を持った女が冷たく言い放った。

俺は仕方なくユウイチと一緒に立ち上がり、3人の前で敬礼の姿勢をとった。

この戦時下では、すべての学生はもれなく軍隊預かりの身分になっていた。従って、俺等のような半端者も、厳格な軍隊の上下関係に従う必要があったのだ。

目の前に並んだ3人は、せいぜい14、5歳にしか見えなかった。それで士官の肩章をつけているということは、憑代の正規操縦士に違いなかった。

「休んでいい」青い瞳の女が言った。

「あ、あの、お美しい憑代のパイロット様が、こんな僻地の学校に何のご用で？」ユウイチがおどけたように言った。

「お前達が知る必要はない」

「ちよつとクリス、この2人は本当に学生なんだから、そんなに厳しくしなくてもいいんじゃない？機密性の高いことでもないんだし」黒髪を後ろ側でひつつめ、形のよいおでこを見せたリーダー格の女が言った。二重の瞳がキラキラと輝いていた。クリスと呼びかけられた女は何も答えなかった。

「隣りの研究所に新しい実験棟が完成するでしょ？私達はそこでちよつとしたプロジェクトに参加するのよ」

「それじゃあ、みなさんは、しばらくの間、ここに滞在するご予定でで？」

「そうなるわね。だから、一応は施設を見て回っているのよ」

「うわお、それは素晴らしい！ この界限なら詳しいので、お買い物やお食事の際は、近くの繁華街へご案内いたしますよ」

「なんだか、ずいぶん調子がいい方ですね」栗色の髪に、水色のセルフレームの眼鏡をかけた、もう一人の女が面白そうに言った。「そんなに私達と仲良くなりたいんですか？」

「そりゃあ、もちろん！」

「確かに、ここには男の制服組はいないし、案内役なんかには便利で丁度いいかもね。一応、自己紹介しておくわ」黒髪の女はそう言うのと、半歩程前に出た。

「ちよっぴり恐くて厳しい彼女が、西澤クリス少尉、14歳」

「眼鏡のショートカットが杉田ノア少尉、14歳」

「そしてあたしが、福本紫織中尉。15歳。3人とも防衛空軍所属のパイロットよ。ちゃんと覚えておいてね」

「いやいや、今日はひなたぼっこをしていてよかったなあ。憑代のパイロットとお友達になれるなんて、最高の幸運ですって」ユウイチは、さらにうれしそうに言い、「柳沼雄一、16歳です、この顔を思い出したら、四年B組まで、すぐにご連絡を」と自己紹介をした。

続いて俺が彼と同じクラスだといって自己紹介をすると、クリスという女が驚いたように言った。

「おまえが岩本明なのか？」

彼女は、『はい』と答えた俺を、冷たい瞳でじっと見つめてきた。

午後は授業の前に、15分程、戦果報告があった。

最近の主だった戦果を勇ましいナレーションとリアルな映像で俺達に見せ、戦意を高揚させるためのプロパガンダだった。

せめて予備隊にでも加わっていたなら、隣り合わせの現実として、もっと身乗り出すようにして観られたのかもしれない。しかし、もうこの手のものには、俺を含めてクラスの全員がしらけきつ

ていていたのだ。男女30人程のクラスメート達は、みな表情のない顔つきで、ぼんやりと黒板横の大きなモニターを眺めていた。

担任の教師からヘッドフォンをつけるように命じられたけれど、畳みかけるようなナレーションが耳に障った。俺は音量モニターをミュートにして画面を眺めた。

先程遭遇した3人の女達のような、あどけなさの残る幼い顔つきをした男女が胸に拳をあて、思い詰めたような瞳を同じ方向に向けていた。

彼らの視線の先には防衛空軍の旗があつた。白地に地球の姿がデザインされた巨大な旗が、宇宙空母の甲板上にひるがえっていた。彼らは意を決したようにヘルメットを装備し、憑代に乗り込んでいった。軽々と飛翔する憑代の機体。闇に塗り込められたような宇宙空間に、憑代の大編隊がつくり出された。

突如、画面がまばゆい輝きに満たされる。それは水晶の結晶体を積み重ねたような、幾何学的な形状を持つ超巨大な構造物の輝きだった。

それこそが人類にとって不倶戴天の敵、アンノーンだった。

憑代の総攻撃が始まった。

その光景は、巨大な電灯に群がるひ弱な羽虫を思い起こさせた。

しかし、この羽虫達は、恐るべき敏捷性と、強力な武器を持っていた。

迎撃に現れたヤスデのような飛翔物体を次々に撃破し、本体へミサイル兵器を発射させる。やがて超巨大な構造物は、自らの輝きを上回る、破壊の光芒で包まれた。

プロパガンダの中では、人類は見事にアンノーンを打ち破っていたけれど、最近では、ついにアンノーンの新兵器が憑代の能力を上回り始め、思うように攻撃に成功していないという噂が流れていた。パイロットの数も不足し始めているという話だった。

五時限目が終わると、隣のクラスのマナがやってきた。

「アキラったら、アイドルみたいな空軍の女達と仲良くなったんだって？」彼女は大人びた切れ長の瞳で、座ったままの俺の目を、責めるように覗き込んだ。

「仲良くなったのは、ユウイチだけだよ。あいつは本当にお喋りだな」

「憑代のパイロットと知り合えたって、はしゃいでいたわよ」

マナは空いていた隣の席に座った。

俺は「喜んでるのはユウイチだけさ」と言い訳を繰り返した。

彼女は結構な焼き餅焼きだったのだ。

確かに憑代のパイロットは、アイドル以上に誰もが憧れる存在だった。

なにしろ彼らは、12歳で人類の盾となることを誓い、時には平然と命を散らせていくのだ。さつき出会った3人の女達も、平々凡々な毎日を過ごしている俺達などとは違い、紛れもなくすべてを犠牲にしてアンノーンと戦っているはずだった。

大人達の多くは、彼らの姿を眼にするだけで、大人になりきっていない背中に背負わせているものの大きさと、彼らを待ち受けている過酷な運命を思い、悲しみの涙を流した。彼らはまぎれもなく英雄だった。

「何か悪いことをしたの？恐そうな金髪の女に呼び出されたんでしょ？」

「何もしてないさ。俺に用があるなんて、きっと親父のことだよ」

「そっか。アキラのお父さん、偉い人だったもんね」

俺は答えるのが面倒で肩をすくめて見せた。

マナは少し照れたように言った。

「今夜、私の部屋に来る？ 昨日の夜、ナオミがお腹が痛いって言い出して、病院に連れて行ったら、そのまま入院しちゃったの。昼休みにお見舞いに行ったら、盲腸なんだって」

ナオミとは彼女のルームメイトだった。俺は「喜んで行くよ」と答えながら、制服のワイシャツをふくらませたマナの胸に目を向けてしまった。

「今、エッチなことを考えたでしょ？」

「うん」俺は柔らかい彼女の胸の感触を思い出しながら、正直に言った。

マナが俺の手をつねった。

「部屋に来たからって、すぐにエッチとかは嫌なんだよ？　ちゃんとお話ししたり、ぎゅっとしてくれないと、全部、おあずけなんだからね」

「何でも全部、マナの言う通りにするよ」俺がそう答えると、彼女は満足そうな笑みを浮かべ、こくりとうなずいた。

12歳の時にATGコードの検査を受け、憑代のパイロットには、どうあがいてもなれないことを通達された俺は、その後しばらくして郵送されてきた紙切れ一枚で、この全寮制の学校に入学するように命じられた。異議などは許されなかった。

誰も知るものがない教室でぼんやりと座っていた時、「どこから来たの？」と話しかけてきたのが、偶然、隣同士になった吉沢マナだった。

俺達は初対面の時から不思議な程、気が合い、その勢いですぐにつき合うようになった。

自分のことがあまり好きになれず、変えようのない現実にも身の置き場のなさを感じていても、傍に、好意を向けて微笑んでくれる女の子がいれば、この世界も、それ程悪くはないように思うことができた。俺はマナが大好きだった。

放課後、学校の校舎と隣接する研究所をつなぐ空中の連絡通路を歩いていると、校庭の向こう側に広がる小さな飛行場に、ランディングしようとして垂直降下を始めた3機の憑代が目に入った。あの3人

の機体だろう。

驚いたことにそれらは、前部に触角のような突起物を持つ、クリーム色をしたオリジナルの機体だった。

現存数100機にも満たないというオリジナルを任されるということは、あの女達は、ATGコードが極めつきに高いのだろう。

俺は憧れのような思いと、唇を噛みたくなるような悔しさを同時に覚え、深いため息をついた。

アンノーンと呼ばれる殺戮兵器との戦いは、俺が生まれるちょうど一年前に始まった。

ある日、隕石と思われる宇宙からの落下物が南米のジャングルを焼いた。

いち早く現場に向かった報道ヘリが目にしたのは、クレーターの中心に刺さった水晶の結晶体のような物体と、その開いたハッチから姿を現そうとしている、カンガルーによく似た姿の巨大なロボットだった。

それは人類の呼びかけに一切返答を返さず、既存の物理法則を無効とするような方法で空を飛び、あらゆる攻撃をはねつけ、青白い炎を吐いて目に入るすべての生物を抹殺し始めた。

一方、その襲来と時を同じくして、世界各地では、突然、謎の物体が姿を見せるようになった。

アンノーンが襲来した翌朝、人を呑み込める程に巨大な昆虫のような物体が、海岸沿いに何十体も積み重なるように打ち上げられていき、都市を貫く幹線道路の脇に深い穴が穿たれ、アスファルトの路面に無造作に投げ出されていたのだ。

それらは、羽と足をもがれたセミのような、ぬめりとした形状をしていた。

最初は、アンノーンの襲来と同時に姿を現したため、殺戮兵器と

の関連性が疑われた。しかし、その物体はまったく人を襲わなかった。何をしても起動しなかったからだ。放射性同位体測定では、少なくともこの物体は、7千年以上も前のものだと言われた。

それが人類よりもはるかに進んだ異種文明の手による構造物だということだけはわかったものの、この物体がつけられた理由も目的も使い方も、ある日を境に人類の前に姿をさらしたことも、すべてが不明だった。

それがわかったのは、住み慣れていた街と両親と兄弟を殺戮兵器に奪われ、廃墟を彷徨っていた13歳の少年が、偶然、焼け焦げた大地に放り出されていた、この物体に遭遇した時だった。

その物体は少年が近づくと、青白く発光しながら地面から数十センチの宙に浮き、はじめて背中扉を開けた。そこには人類にちょうどよいサイズの椅子らしきものを取り付けてあった。逃げ場をなくしていた少年が乗り込み、絶望の涙を流すと、構造物は扉を閉め、音もなく空へ飛翔した。そして一瞬のうちにカンガルー状のロボットを探し当て、その前の宙にぴたりと制止した。

ロボットが炎を吐き出しても、その物体はびくともしなかった。

目の前のロボットに対し、少年が怒りと憎しみを解放すると、物体が反応して光線を放った。

その一撃だけで、戦術核でも傷一つつけられなかった異星からのロボットは、粉々に破壊されたのだった。

それは人類に託された武器だった。

数千年前に地球を訪れた異種文明は、アンノーンの襲来を見越し、人類のDNAにある一連の起動コードを組み込み、強力な武器を置いていったのだ。

「私はここに来る前、3ヶ月程、ムーンスペースにある岩本教授直下の特殊部隊に所属していたのだ」

クリスという女はそう言うと、俺に向かって小ぶりのメッシュケースを差し出した。

「教授から預かってきたものだ」

彼女はがらんとした会議室のような一室で俺を迎えると、前置きの世間話など一切することなく、すぐに用件を切り出してきた。

メッシュケースの中味はアルバムや手紙の類らしかった。俺にとつては、ここに得意気に持ってこられても、そのままゴミ箱に直行させてしまうような、その程度の代物だった。

「中味をあらためないのか？ 教授はおまえのことを、随分心配しておられたぞ？」彼女が俺を責めるように言った。

「何か、父から聞いているんですか？」俺は訊ねてみた。

「教授は、おまえと疎遠になっっていることを嘆いておられた。入学以来、ほとんど連絡がなく、学校が長い休みになっても、一向に帰って来ようとしないうまえのことを、気にかけているのだ」

「まあ家族には、それぞれ色んな事情がありますよ」

「教授は、私達にとても親切にしてくれた。同世代のものには、命がけで戦っている者も少なくないというのに、あんな風に、屋上で緊張感なくだらけ切っているなんて、おまえは随分気楽な身分のようだな」

俺はため息をついて言い返した。

「西澤少尉だつて、アメリカ人のようだけど日本名だし、そういった面倒なことは、あまり他人には打ち明けたくないでしょう？」

クリスは冷たく俺のことを睨んだ。

事情を話すべきなのか迷ったけれど、彼女はクールな外見に似合わずウエットな部分が多そうだったし、ここできつちり理解してもらわないと、後々も、口うるさくされたり、面倒なことになりそうだった。

「俺が事故にあったことを聞いていますか？」

「いいや」

俺は仕方なく、六年前に記憶を失した出来事を打ち明けた。

10歳の時まで両親と暮らしていた千葉県木更津一帯がアンノーンに襲われ、母親を失ってしまったこと。俺も大怪我をし、その後

遺症で以前の記憶のほとんどを失ってしまったこと。それから、記憶が混乱してしまい、思い出がない父親のことが苦手な存在になってしまっていること。それに加えて、憑代研究の第一人者でもある高名な科学者の息子なのに、憑代に乗れないことがどうも気まずくて、なるべく父を避けていること。そんなことを俺は淡々と話した。

気がつくと、彼女は目を伏せていた。

「……私はどうも結論を急いでしたっけ。つらい話をさせたようで、すまなかった」

俺は肩をすくめて答えた。クリスはあの目つき程、悪い奴ではないらしかった。

「私も6年前、肉親をアンノーンに殺された」

「ご両親ですか？」

「いや。両親は、今も行方不明扱いだから」彼女は寂しそうな笑みを見せ、言葉を続けた。「憑代のパイロットだった兄だ」

「6年前というところ……、もしかしたら、あの木星侵攻の時？」

「そうだ」

木星侵攻とは、人類がアンノーンに対して、初めて大勝利を収めた戦いだった。

人類はこの勝利によって、太陽系だけではなく、時空転送装置の向こう側にあったアンノーンの機械惑星群を壊滅させることに成功し、つかの間の平和を手に入れた。しかし、作戦に参加した数百名のパイロットのうち、地球に戻って来られたのは、10名にも満たなかったという。

「こちらの方こそ、勢いで少尉が日本名だなんて、失礼なことを口にして、申し訳なかったと思っています。すいませんでした」俺は頭を下げた。詳しい話を聞いた訳ではなかったけれど、彼女が過酷な生い立ちを辿ってきたことは、たやすく想像できた。

クリスは多少なりとも俺のことを信用してくれたのか、日本にやって来たのは、北アメリカに3発の小惑星爆弾が落とされた3歳の

時だったことを語った。

混乱の中、4歳年上の兄の手をずっと離さないようにしていたら、彼女はいつのまにか海を渡り、横浜に大きな住まいを持つ西澤という里親に迎えられていたのだという。

小さな兄妹の親代わりとなった中年の夫婦は、国や両親を失った子供達を積極的に受け入れていた人道活動家で、今でもたまに里帰りをしてみると、その家には十人近くの子供達が住んでいて、全員で自分のことを歓迎してくれるのだという。

この研究所では、憑代の起動実験プロジェクトに携わっていると語った。

なんでも、10数年前に発見されて以来、どうやっても起動しない赤い機体の憑代があるらしく、ATGコードの特徴が異なる3人のパイロットが起動実験用に出されたのだという。しかし、実験の方は、まったく成功してないらしかった。

「どうも私には、人を見る目が無いようだな」クリスは小さなため息をついた。「おまえとは、気が合いそうだから、これから、たまには話し相手になってくれ」そう言って俺に微笑んだ彼女は、冷たい表情と大きな落差があるためなのか、ドキリとさせられる程、かわいらしかった。

「こんな早くに、なんでシャワーなんか浴びてるんだよ？」

夕食後、シャワールームから出てみると、ずっとネットルームに籠もっていたユウイチが部屋に戻っていて、俺を咎めるように言った。

「まさか、マナちゃんのところにお泊りして訳じゃないだろうな？」

「ルームメイトが入院したっていうからさ」

「ふうん、おまえはいいよな。あんなに可愛い彼女がいてさ。すごい人気あるのに、彼女、お前一筋だもんな」

そういうユウイチの方は、入学直後からずっとルームメイトだったので、俺はすべての交際歴を知っているけれど、上級生同級生下級生合わせて10人以上の女子とつき合っていた。もてる癖に、どいう訳か誰とも長続きしないのだった。

「こっちはおまえの人気ぶりががうらやましいよ」俺は言った。

その時、乱暴なノックの音が響いた。扉を開けてみると、名前を知らない他のクラスの奴が俺に紙袋を差し出し、にやにやしながら言った。

「Lサイズ、ひと通り、ここに入っているぜ。使った後は、キープよろしく」

俺は礼を言い、紙袋を受け取った。中には女子の制服一式と、かつらが入っていた。男子寮の共用品となっている変装用のグッズで、最後に使った奴がきれいに整えておく決まり事になっていた。

外に出た後にこれに着替え、数人の女子に囲んでもらえば、難なく女子寮に忍び込めるのだった。

入学当初は制服の着方一つとっても厳しく校則を守らされたものの、高校生にあたる16歳になってからは、何でも俺達の自主性に任されていた。

女子寮への侵入にしたって、学校側が本気で取り締まる気になれば、俺達は手も足も出ないはずだった。それなのに、ここまで放任されているのは、きっと大人達が俺達を憐れんでいるせいなのだ。

ユウイチが言った。

「おまえ、クリス少尉に会ってきたんだろ？ どうだった？」

「別に大した話はしなかったよ。親父の知り合いついていうだけさ」

「ああ？おまえのことなんかどうでもいいの。俺のこと、ちゃんと売り込んでおいてくれたのかってことだろ？」

「ごめん、すっかり忘れてた」

「おいおい、忘れてたじゃないだろ？ 頼むよ。クリス少尉、ありやあすげえ美形だし、14歳なのに胸もボンだし、誰だってお近づ

きになりたいって思うはずだろ？」

「でもさ、あの見た目通り、性格はかなりきついぞ」

「大丈夫だよ。どっちかって言えば、俺は打たれる方が好きなんだから」

さっきまでユウイチは、今月分のネット検索の割り当て時間を目一杯使って、あの3人のパイロットの素性について調べていたと言った。クリスとノアについては大した情報を得られなかったものの、リーダー格だった黒髪の紫織という女は、空軍のエースらしく、友軍機を救った活躍談や、勲章を授与された記事が沢山出てきたという。

「あんなに可愛くて、正真正銘の英雄なんだぜ、すげえよな」

ユウイチは、男の甲斐性とは憑代のパイロットとデートすることだと信じ切っているようで、俺は次にクリスと会う機会があったら絶対に引き合わせると約束させられてしまった。

マナは友達から可愛いキャンドルをもらったと言って、うれしそうな様子で火をともし、部屋の電灯を消した。

俺達はベットに腰をかけて身を寄せ合い、ここ最近の出来事なんかを語り合った。中には、繰り返しになる話題もあったけれど、そんなことは構わなかった。一緒にいれば、それだけで楽しかったのだから。

少し話が途切れた時に、マナが言った。

「私、知っているんだよ。アキラは憑代に乗りたくてしょうがないんだよね？」

「そんなことないよ」

「嘘つき」マナは微笑みながら俺の頬を軽くつねった。

「本物のパイロットに出会ったから、落ち着かないの？　なんか、ちよつとだけイライラしてるみたい」

これまでと同じように、マナは凶星をついてきた。彼女には、こちらの気持ちを読み取る装置でもついているのか、俺は自分でも気

づかなかった心のうちでさえ、正確に言い当てられていた。

「そう見えるのかな？」

「うん。時々、口惜しそうな顔しているもの」

俺はマナの肩に手をかけて引き寄せた

「なんであんな恐いものに乗りたいがるの？私は絶対に嫌だな」

「心配することなんかないさ。こっちは、どうやっても乗れないんだから」俺はそう言いながら、彼女の体を後ろに押し倒した。

「ねえ、もしもATGコードなんかに関係なく、誰でも憑代に乗れるようになったらどうするの？」マナがまっすぐに俺を見ていた

「それは絶対に無理なんだよ」

「本当なの？」

「うん。憑代に一番詳しい俺の親父が言っているんだから、間違いないさ」

「じゃあ、ひと安心かな。アキラがあんなのに乗ったら、無理してすぐに死んじやいそうで怖いんだもん」

俺はマナを抱きしめた。

「私達は、ずっと一緒にいないといけないんだよ」マナが俺の胸の中で言った。

キスをした後、すべすべした首筋に唇をあてると、マナが俺の動きを止めて言った。

「まだだめ」マナは俺にしがみついてきた。「もう少し、このまま、ぎゅっとしていて」

俺ははやる気持ちを抑え込み、彼女の言いつけに従った。

真夜中にはっとして目覚めた。

見覚えのない部屋の様子に、一瞬、あわててしまう。もちろん、どこにいるのかわんてすぐに思い出すのだけど、それでほっとできる訳ではなかった。どこか別の所にこそ本当の自分の居所があるような気がして、ほんの少し、がっかりしてしまうからだった。

マナは隣で小さな寝息を立てていた。

俺は彼女を起こさないようにゆっくりとベットから降り、備え付けの冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して口をつけた。

俺達人類の遺伝子には、はるか昔、憑代を残していった異星人が付け加えた一連のコードが組み込まれている。

ヒトゲノムの中には、未だに解明できていない領域が90%以上もあるらしく、その中に、憑代の起動と関連を持つ特殊な塩基数列が発見されたのだ。これは俺の父親が突き止めたらしい。

おそらく憑代を残した異種文明は、不格好な石器なんかを握りしめていた俺達の祖先に、コードだけではなく、何らかの力をも与えたのだろう。現在、全人類がもれなくATGコードを持っているということは、最初にコードを与えた少数のグループに人類の征服者となる地位を与え、何世代にも渡って交配を繰り返させることで、コード持ちの数を隅々にまで広めていったと考えられていた。

人類は数千年も前から、使い道のなかったコードの転写を繰り返してきたのだが、気が遠くなるような歳月の間に、その塩基数列上には、大なり小なりのエラーが蓄積されていた。

代々受け継いできたコードにエラーが多ければ憑代が微動だにせず、エラーが少なければ憑代が起動するのだ。しかも、そういう訳なのか、コードがオリジナルに近ければ近い程、憑代は優れた性能を発揮した。

そしてもう一つ、憑代の起動に関わりを持つ要素があった。

それが成長ホルモンの一種、テストステロンの中に微小に含まれる一酵素で、この酵素は攻撃性を増幅させる作用を持っていた。

実際のところ、テストステロン中の酵素と、ATGコードにどのような結びつきがあるのかは未だ不明だったが、二つの要素が結びつくことで、ある種の鍵のようなものが生成されるらしかった。

その鍵が、憑代のブートシーケンスの中で唯一欠落している部分を補完し、起動過程をすべて終了させているのだという。

つまり、憑代を起動できる者は、ATGコードがオリジナルの状

態に近く、成長ホルモンが分泌される思春期を迎えた男女に限られているのだ。成長期を終えた大人では、いくらATGコードのレベルが高くても、憑代は起動しなかった。

最初は、なぜ憑代の起動に、そのような複雑なプロセスが必要とされるのか、誰も納得がいく説明できなかった。しかしアンノーンとの戦いを通し、敵の正体について大まかな見当がついた時から、憑代の起動の仕組みに、俺達人類は大いに安堵したのだ。

アンノーンは、無機的な生命体だと考えられている。

奴らは生物のように限りある命や、時間軸に拘束されるような意識を持っていない。現在、最も有力視されている説では、敵の本体は巨大なAIの集合体で、その活動領域は、機械的なネットワークを通し、大宇宙を覆うように広がっているのではないかと考えられていた。

かつて奴らの侵攻を受けた際、人類が構築していたコンピュータネットワーク網が易々と乗っ取られ、世界中が大混乱に陥ったことがあった。たった一度のハッキングで、人類すべての活動が数週間になたってストップしたのだ。それ以来、あらゆるネットワーク網は軍の管理下となり、限定的な使用しか許されなくなった。

敵が高度に進化した無機的な生命体である以上、コンピュータ制御のものすべては常にハックされる危機にさらされた。

しかし、人類にとって唯一の武器である憑代は、起動に人間の存在が組み込まれているため、アンノーンにハックされる心配がまったくないのだった。

翌日の午後、いきなり研究所に呼び出された。

行ってみると臨時の採血で、俺はモルモットらしい扱いを受け、たつぷりと血を抜かれた。

針の跡を押さえながら廊下を歩いていると、いきなり女の声に呼

び止められた。

振り返ってみると、そこには紫織とノアが立っていた。二人は口イヤルブルーのフライトスーツを着用し、白衣姿の連中を従えていた。

「クリスから聞いたけど、キミって岩本教授の息子さんだったのね」
紫織という女が言った。

俺は一応敬礼をし、続いてうなずいた。

「あの教授の息子が憑代に乗れないなんて、質の悪いジョークみたいだわ。それとも、キミはホッとしているのかしら？ 早死にしないで済むことに」

「ホッとはしていません」

「ふうん。じゃあ、乗りたいと思ったことがあるの？」紫織は俺に顔を近づけて言った。

「まあ、何度かは」

「だったら、キミを後ろに乗せてあげましょうか？」紫織は舌をペロロりと出し、自分の唇を舐めた。

「ちょっと、紫織、何を考えているのよ？」ノアという女ががめるように言った。

「彼の夢を叶えてあげただけよ。ここは正規の軍事施設じゃないんだし、少し位、羽目を外したって構わないでしょ？」

ノアはため息をついた。「私はこれ以上、何も聞かないことにするわ。一緒に始末書を書かされるのなんて馬鹿らしいもの。後は一人でお好きにやって頂戴」彼女はそう言って一歩下がり、腕を組んだ。

「どうするの？ キミが本当に望むなら、願いを叶えてあげるわよ？」紫織は俺に向かって微笑んだ。

着用してみると、ヘルメットやフライトスーツは意外な程の重量があった。

「それもあなたのお父さんが開発してくれたおかげなのよ。ちょっと

と前のタイプはもつとかさばって重かったんだから。脱着も、随分楽になったのよ」ヘルメットのフェイスプレートを開いたまま、紫織が言った。

飛行場の傍らでは、面白そうな笑みを浮かべたノアの隣りにクリスが立ち、冷やかな目でこちらを見つめていた。

「最新のスーツなら、1時間程度は汚染されないわ。それまでには帰してあげる」

目の前には、脚立のような小型のトラップが横付けされた、少しクリーム色がかった憑代の機体があった。

コクピットは狭く、前方の操縦席のすぐ後ろに、予備のような座席が設けられていた。

俺は紫織に続いて狭苦しいスペースに潜り込み、ショルダーハーネスやレッグガードで体を固定した。

「憑代、起きなさい」彼女が話しかけると、憑代が目覚めた。

何かの羽音のような低い音が腰のあたりから響き、コクピットを覆う後付けの電子装備が瞬いた。キャノピーのような真上にある扉が音もなく閉まった。

何の予告もなく、無骨なコクピット回りがすべて透けていき、周囲360度の視界が開けた。上には空が、下にはコンクリートの滑走路が、左右には小ぶりの管制塔や実験棟が見渡せた。これが「STVID 仮想可視化システム」と呼ばれるものなのだろう。憑代が機体の外側の視覚情報を俺の脳に直接転送し、外殻が透けたかのように見せているのだ。

「シンデレラ城のミステリツアーにようこそ」紫織がわずかに振り向いて言った。「たっぷり楽しませてあげるわね」

憑代が、ゆっくりと円を描くように上昇を始めた。

飛行場がミニチュアサイズに見える高度に達すると、紫織は憑代に命令を下した。

「GO」

あまりのスピードに青い空と白い雲が交じり合い、後方に飛んで

いった。

急上昇、急旋回、急制動からのゼロターン。それでも体にかかるGは、機体の動きがわかる程度の軽さだった。これが反重力装置の効果なのだろう。

憑代に操縦桿は必要なかった。操縦者の精神と憑代の操縦系がダイレクトにリンクするので、操縦者が思い描いた通りに憑代は飛ぶのだった。

以前、父親の書斎に置いてあったノートパソコンの中に、憑代のマニュアルのようなものを見つけたことがある。そこには基本的な操縦方法が記載されていた。例えば右に曲がれと念じるだけでは、憑代は、ずっと右に曲がり続けてしまう。継続的に操縦者の意志を伝えていくためには、進行方向上の空間に点を思い浮かべ、その点を繰り返し置いていくことで、一続きの線にしていく方法が解説されていた。

とは言っても、目の前の紫織は、そんな風に憑代を操っているようには思えなかった。もっと直感的に自由に憑代を操っているように見えた。

いつしか俺は、めまいが連続するような飛翔感に、体中が高揚するような不思議な感覚を覚えていた。三半規管が激しくシエイクされる度に、腹の底から、まじり気のない笑いがこみ上げてきたのだった。

高い空を、こんな風に自由に疾走できる憑代と紫織が心底うらやましく、そして素晴らしいと思った。俺は全身でこの感覚を楽しんだ。

「ここは、風がやさしいわ」

紫織はそう言うと、湧きあがるような積層雲の真上に、憑代をホバリングのように静止させた。傾いて力を失った太陽が雲の縁を淡いオレンジに輝かせていた。高度は2千メートル位だろう。

「キミは何者なの？結構、アクロバティックに飛んでみたのに、全

然平気なのね。あんな風に飛んで見せたら、誰だって、すぐに降りてくれて泣き言を言うのよ。それなのに、キミは怖がるどころか、楽しんでいるみたいじゃない？」

「最高でした」俺は答えた。正直に言えば、まだまだ物足りない位だった。

「なんか、悔しいわね」

気圧が抜けるシュツという音が響き、頭上のキャノピーが開いた。紫織はショルダーハーネスのロックを解き、座席から立ち上がった。そしてヘルメットをはずして笑みを浮かべた。

「こうすると、信じられない程、気持ちいいのよ」

俺は紫織の言葉に従い、ヘルメットを脱いだ。機体から空へ顔を出してみると、空気が凍りつく程に澄んでいた。俺は深い深呼吸を繰り返した。肺が冷たい空気で満たされ、身体が浄化されたような気分になった。

紫織と目が合った瞬間、彼女は俺にキスをしてきた。

「何を？」

「キミのことが少し気に入ったのよ。キミには、是非とも、私のことをずっと覚えていてもらわなくっちゃ」

「どういう意味ですか？」

「今の時代、戦士はすぐに死んでしまうの。でも、それだけで終わるじゃ寂しいでしょ？ 誰かの心の中で、少し位は長生きしたいのよ」

俺は思いついて尋ねた。「少尉は何時間搭乗しているんですか？」

「300時間を超えてからは、一タカウントしていないわ」

「なんですって？」

「さすが教授の息子さんね。憑代のこと、結構詳しいのね」

「リミットをオーバーしているのに、俺を乗せるなんて、どうしてそんな無駄なことをしたんですか？」

「キミが気にすることはないわ。私はとうに無制限搭乗の申請をしているし、正式に許可されているの。憑代に乗れる限りは、ずっと

乗り続けるつもりよ」

俺は言葉を失った。紫織はグローブを外すと、冷たい風に触れるように、空に素手を伸ばした。

「まあ、あんまり長生きはできないわね」

憑代の動力源は、数百もの極小の核融合炉と、その数と等しいナノサイズのブラックホールを立体的な八二カム構造に組み上げ、常温での核融合を可能にした集積コアだった。

憑代の研究によって、人類は夢物語でしかなかったテクノロジーを手に入れたものの、それでもなお、超巨大な原子炉と隣り合わせのようなコクピット内のシールドは未だに完全ではなかった。

パイロット達は搭乗する度に未知の放射線によって被爆し、少しずつ命を削り取られているのだった。

フライトスーツのシールド性能が向上しているとは言え、搭乗時間がリミットとされる300時間の場合では、五年後の生存率は5%にも満たないはずだった。

「本当のことを言えば、私が役に立っているなんて、一つも思えないの」紫織は俺によりかかっていた。「いくらアンノーンを叩きつぶしても、やつらは平気な顔で同じようにやって来るし、きりがないのよ。本当にやつつけてやったぞっていう手応えが全然感じられないの。考えてみれば、憑代が作られた数千年前から、この戦争は続いているはずなんでしょ？ それなのに、私達がいくら英雄に持ち上げられて頑張ってみても、戦えるのはたったの3年程度なのよ。そんなのって、本当に一瞬みたいなものじゃない？ 死んでしまつたら、それっきりで、誰も私達のことなんか覚えていないのよ」

「少尉みたいに有能なパイロットが、役に立っていない訳がないですよ」

「部隊の中でこんなことを口に出すと、うるさい男子なんかが、思想教育のやり直したとか、面倒なことを言い出すのよ。最近は、部隊にいるのが窮屈でしょうがなかったから、キミのお父さんの誘い

に乗って、ここに来てみたの」

紫織は俺に向き直り、もう一度キスをしてきた。

「キミは余命わずかな女の子の頼みを聞いてくれないの？」

俺は紫織を抱きしめた。微笑んだマナの姿が思い浮かんだけれど、俺はそれを追い出した。

「狭いから、工夫しないといけないけれど、この高さでするのが、すごいよ」目の前で紫織が微笑んでいた。

「絶対に忘れられないんだから」

空が水彩画のような夕暮れに染まった帰り路、紫織は何も話そうとしなかった。俺もその方がいいのならと、黙って後ろに座っていた。彼女はまっすぐに憑代を飛行させた。

突然、コクピット内に赤いアラートが瞬いた。

「映像切りかえて」紫織が冷静に言った。

前方の複合モニタには、何かの構造物らしい姿が映し出されていた。

アンノーンは完璧に近い電波吸収性とゼロに近い赤外線放射率を有しているため、レーダーの類ではまったく捕捉することができなかった。オリジナルの憑代だけが備える微細動振動センサーだけが有効半径5キロという遠距離からの捕捉を可能にしていた。

「福本中尉、そちらの状況は？」ノイズ混じりのクリスの声がオーブンに響いた。

「アンノーンに捕捉された。現在位置、C31F2K、高度およそ2千2百。奴はこちらよりも動きが速いようだ」

「早い？ まさか、例の新種なのか？」

「その通りだ。今、五芒星のような形が視認できた。こちらには満足な武装がない。まずは帰投を最優先させる」

「そちらが最短距離のルートをトレースすれば、クリス機とノア機の両機は、およそ10分後に合流できる。それまで保たせるのだ」

通信を終えた紫織がこちらに向き直り、ため息をついた。

「キミはついていないわね。あのアンノーンはとても手ごわい新種なの。専用の武装がないと、まるで歯が立たないわ」彼女はフェイスプレートをあげて俺をじっと見つめた。「逃げ切れるか試してみるけれど、無理だと思うの。覚悟を決めて頂戴」

中途半端なままで終わってしまうことがいくつか思い浮かんだけれど、なぜかあっさりと諦めがついた。それも悪くないように思えた。俺は後ろから詩織の両肩に触れていった。

「少尉と一緒になら、かまいませんよ」

紫織は肩に置いた俺の手を、しばらくの間、握っていた。そして心を決めたように、唐突に前を向いて言った。
「私達のために、祈っていて」

そのアンノーンは、まるで巨大なヒトデだった。完全に均等がとれた五芒星の形をしていた。

瞬間移動を繰り返すような、現実離れた軌道を見せながら、全力で飛行する憑代の後方に迫ってきた。

そこから紫織は信じられないような操縦を見せた。さっき俺に見せたものなど、ただのお遊びだった。速度では勝てない相手を振り切るために、空が溶け出すスピードのまま、あらゆる角度へ急旋回を繰り返し、猛追する相手を一定の距離以上に迫らせなかった。

コクピット内のGは打ち消されているはずなのに、俺は左右にヘルメットをもっていかれ、上下左右の感覚を奪われた。内臓が宙で踊っているようだった。

それだけではなかった。

紫織は複雑な軌道を描きながら、その途中で機雷のように宙に制止する兵器を撃ち出し、見事にアンノーンへの攻撃に成功していた。この超高速下で、予測がつかないようなアンノーンの軌道を見極め、罠を仕掛けているのだ。超人的な技倆だった。

アンノーンは罠にかかる度に、戸惑ったように幾何学的な全身を震わせた。

距離が開き始めると、アンノーンは、捕捉することをあきらめたのか、無造作に何かを撃ちだした。「当たらない」と思った瞬間、それは放電のような蜘蛛の巣状の光線になり、こちらに迫ってきた。紫織の操縦がさらに冴え、憑代はいかず状の光線を、手に掴もうとする羽毛のように、ふわりとかわしながら前方へと突き進んだ。その時、奴が再び撃った。今度は1発だけでは終わらなかった。俺は五発まで数えたところで前を向き、紫織の操縦に注目した。

紫織はためらうことなく、絶望的なまでに細かく張り巡らされた網目のような光線の中に飛び込んだ。そして速度を落とすことなく小刻みなターンを繰り返し、のたうつように迫ってくる無数の光線をよけ続けた。コンマ数秒足りとて、真っ直ぐには飛んでいなかった。目の前の光景は、まるで次々に切り替わる万華鏡を覗き込んでいるようだった。

やがて機体に何かがかすったような衝撃が走った。

ターンがわずかにぶれた。

「まだだ！」紫織が叫んだ。

目の前に迫る光線をかわしたと思った瞬間、真横から激しい衝撃が加わり、憑代はあっけなくコントロールを失った。

「ちくしょう！」紫織の叫び声が響いた。俺達はコマのように回転しながら吹き飛ばされた。

気がつくと、コクピットの中は焦げ臭い刺激臭が充満し、いまだにアラートが瞬いていた。

憑代はどこかの砂浜に突っ込んでいた。

STVID仮想可視化システムがおかしくなっているようで、周囲の映像には黒片まじりのブロックノイズが多く含まれていた。

紫織は座席によりかかったまま、身動きひとつしていなかった。

細い腕が傍らに投げ出されていた。

「少尉？」

その時、頭上に巨大な影を感じて見上げると、五芒星のアン

ノーンがこちらを呑み込める程近い距離に迫っていた。

「少尉、逃げましょう」俺は彼女のヘルメットのフェイスプレートを開け、ハーネスのロックを解こうと試みた。

何かが憑代の機体を激しく叩いた。アンノーンからホースのような物体が伸び出していた。それら銀色の物体は節足昆虫のようにうごめき、憑代の機体に巻きついた。

突然、アラートも外側の景色も、すべてが沈黙した。次いで金属が裂けるような音が響き、クロームに輝く物体が滑るようにしてコクピットに侵入してきた。それは紫織を見つけると、彼女の足に絡みつき、威嚇するように鎌首をあげ、先端部を鋭く尖らせた。

「やめろ」俺は無我夢中で叫んでいた。

無抵抗な首筋に、ナイフのような物体が打ち込まれた。

紫織が目を見開き、苦悶した。彼女の唇が「や、め、て」と動いた。さつきまで俺の自由になり、切ない喘ぎ声をあげていた細い体が痙攣していた。

俺は激しい怒りを覚えた。アンノーンが憎く、全身が震え、熱い涙が流れた。こんな爆発するような怒りを覚えるのは初めてだった。脳裏のどこかで、何か化け物じみた赤いものがゆらりと動いたように思えた。俺は絶叫していた。

憑代が再び起動していた。俺が怒りを向けるとホース状の物体が砕け散った。

憑代の機体が軋むような音を立て、変形し始めていた。

目を開けると、傍らにクリスが座っていた。

ここは病室のようだった。俺の腕には点滴用の針が刺さっていた。「中尉は無事なんですか？」

「起きたのか？ 今、ドクターを呼ぼう」彼女は立ちあがりかけた。

「質問に答えてください」俺はもう一度訊ねた。

「命に別条はない」

俺は安堵のため息をついた。

「しかし、全身への打撲がひどいのだ」

「打撲？アンノーンに刺された傷は？」

「あれは致命傷ではない。アンノーンを撃破する際、相当なGがかかったらしいのだ」

「G？」

「何があつたのだ？ なぜおまえの体はダメージを負っていない？ 同乗していなかったのか？ どうして憑代があのような形になったのだ？」

「あんな形？」

「紫織の憑代は、変形したままなのだ」

「あの時……」何か自分がひどい間違いを犯したような気がしていた。あの時、激高した俺は、何かに意識を飲み込まれた。その後、何をしたのかは、記憶に黒い穴があいているようで、まったく思い出せなかった。

「……俺には、何もわかりません」俺は答えた。

クリスが俺をじっと見つめ、深いため息をついた。

赤い機体

俺はまるで何かの犯罪者のような扱いを受けた。

病室の窓には頑丈そうな鉄格子がはめてあったし、室内の装備品と言えば、ベットとサイドテーブルの2つだけで、それ以外はテレビも冷蔵庫も何もなかった。出入り口には見張りの無口な兵隊が24時間立ち続け、トイレで用を足す時も、連れションをするようにぴったりとつきまとわれた。

病室の窓からは、遠くに俺が通う学校のグラウンドが見えた。確か研究所内には、病院と医療用の実験研究室を兼ねた施設があったはずで、どうやら俺はそこに収容されているようだった。

学校には行く必要がないと言われ、所持品はすべて没収され、軍支給品のトレーニングウェアと下着と身につけるように命じられた。外部との連絡も一切断たれた。通信機器やパソコンなどの類には触れることを禁じられ、さらに言えば、質問も抗議も許されなかった。学校の友人に連絡をしたいという俺の願いはその場で黙殺された。

その一方で、紫織を見舞いたいという願いの方は、クリスがよい方向に動いてくれたのか、監禁生活の4日目に、やっと許可された。

「やあ」俺は紫織に声をかけた。

紫織は少し恥ずかしそうな微笑みを見せた。

彼女は背もたれの角度をわずかに起こしたベットに身体を横たえていた。左半身の損傷が特に酷かったようで、肩と腕がしっかりと包帯で固定されていた。

「お互い、助かってよかったわね」

「少尉のおかげですよ」

「私、あの時のことを何も覚えていないのよ」

「僕もです」

「本当なの？キミが助けてくれたような気がするんだけど」

「パイロットでもない俺にできることなんか、何一つないですよ」
俺は答えた。

「昨日、憑代にはもう乗れないって宣告されちゃったの。体がアウトなんですって」

俺は折りたたみの椅子を広げ、紫織の傍らに座った。彼女は点滴用のチューブがテープで固定されている右手を、ゆつくりと目の上に掲げた。その動作と、あの時、雲の上で空に手をかざした姿が重なった。

「私、どうしたらいいと思う？」

「少尉が退役したら、必ず俺に落ち着き場所を教えてください。そばに引越していきますから。後は、2人でのんびりやればいいんですよ」

「もしかしたら、キミが支えてくれるっていうの？」

「ええ。少尉は僕にとって、ただ一人の英雄ですから。あの時の少尉は、本当に勇ましくて、かつこよかったです」

「ふうん、キミって、そんなことを言ってくれるんだ？ 悪くないわね」紫織は楽しそうな笑みを見せた。

「でも、私達って、エッチなことはしたけれど、お互いのことなんて、何も知らないのよ？」

「一番大事なところは、結構、わかりあっていると思いますけど」
紫織は俺をじつと見つめると、「そんなに簡単じゃないわ」とだけ言い、向こう側にある窓に顔を向けた。

このまま黙り合っているも仕方がないので、俺は思いつくままにこの病院で軟禁状態になっていることや、変に身体が丈夫で大した怪我をしなかったことや、あまりにも退屈なので、入口に突っ立っている兵隊に何か本を持ってきて欲しいと頼んだら、露出過多なグラビア雑誌ばかり持ってこられて逆に困ったことなどを、つらつらと話し続けた。

そのうち、自分の故郷のようところが千葉の港町の近くにあっ

たことを話すと、紫織も興味を引かれたようで、こちらに向き直り、そこがどんなところなのか、もっと話して欲しいと言ってきた。

いつの間にか俺達は色んなことを語り合っていた。

紫織の故郷は和歌山の小さな港町らしく、実家では両親と祖父母が一緒に暮らしていると言った。

やがて病室の外で待っていたクリスが扉をノックし、顔を出した。
「時間だ」

仕方なく椅子から立ち上がると、紫織が俺に訊ねた。

「ねえ、さっきキミが言ったことを、本気で考えてもいいの？」

「もちろんですよ」俺はそう答えて立ち上がり、クリスが見ているのも構わず、かがみ込んで紫織の頬に自分の頬をあてた。

「許可が下りたら、また、見舞いに来ます」

俺がそう言っていると、紫織は少し寂しげな笑みを返した。

病室を出ると、クリスが前を歩きながら言った。

「紫織とは、随分仲がよくなったようだが、お前にはかわいい彼女がいるそうじゃないか？ 毎日、お前に面会できないかと訊ねて来ているらしい」

「刑務所みたいなこの病院を出してもらえたら、すぐに、けじめをつけますよ」

「お前は知っているのか？ 紫織は何度も、ああやって後ろに男を乗せているんだぞ？」クリスが立ち止まって言った。

俺は何も答えず、青いクリスの瞳を覗き込んだ。

「……悪かった。聞かなかったことにしてくれ」

「想像はしていましたが、構いませんよ」

「本当に悪かった」彼女は頭を垂れていた。「私はどうにもならない愚か者だ。おまえに友達になってくれと言っておきながら、平気で傷つけるような真似をしている」

クリスの瞳はいつもより濡れているように見えた。

俺達はエレベーターに乗り込んだ。

「きっと私は、紫織のことが不潔に思える一方で、実は、とてもうらやましいのだ。どうせ死んでしまうのなら、私にだって、思う通りにやってみたいことはある」

「少尉は死にませんよ」

「気休めだな。あのアンノーンをお前も見たのだろう？ あいつ等はすぐに進化して現れる。残念だが、もうすぐ我々は完全に追い越されて、まったく歯が立たなくなってしまうのだ」

俺は肩をすくめて言った。

「きっと、悪いことだけじゃなくて、良いこともありますよ」

「死にかけたおまえに、そんなことを言える余裕があるのか？ 随分変わっているんだな？」 クリスが初めて楽しそうな笑みを見せた。

「少尉には、特別な人がいないんですか？」

「一度、兄に似た人にあこがれたことがある。でも、すぐに戦死してしまった。それから、恐ろしくて無理だ」

その時、エレベーターの扉が開いた。そこには俺を病室まで連行しようとして待ち構えていた兵隊が立っていた。

「愚痴を聞かせてすまなかった」

「そんな話なら、いつでも聞きますよ」

寂しそくに微笑んだクリスの目の前で、扉が閉まった。

翌日の朝、俺は階級章のついていない空軍のサービストレスを着てネクタイを締めるように命じられた後、両側を頑丈そうな兵隊に付き添われて飛行場に連行された。

格納庫の前で、白衣を着た男が俺を待っていた。年齢は30前後だろうか。長い真っ直ぐな髪を後ろで束ねていた。

「君が岩本明君だね？」

俺がうなずくと、その人物は急に人懐っこい笑みを見せた。「私は、名波という者だ。キミのお父さんの元で働いていたこともある。つまりは科学者だ」

俺は差し出された右腕を握った。

「君にどうしても見せたいものがあって、ここに連れてきてもらった」

名波は兵隊達を立ち去らせ、俺を格納庫の中に案内した。

天井が高く、がらんとした空間には、二機の憑代が置かれていた。驚いたことに、片方の機の後方側面には直線的な深い傷が刻まれていた。

「この傷はどうしたんです？」俺は名波に訪ねた。

オリジナルの憑代には、人類がいまだにコピーできないテクノロジーの内の一つ、自動修復機能が装備されているので、基本的には人の手による整備が必要なかった。多少の傷ならば、数時間で勝手に修復されているはずだった。

「うん、その傷は、ちよつと原因不明なんだ」名波が言葉を濁すように言った。

俺は質問を変えた。「福本中尉の憑代はどこにあるんですか？」

「あれは研究室の方に運んである。興味深い現象が見られたからね君に見せたいのは、もう一つの機体なんだ」

「赤いという憑代ですか？」

「ふうん、君は機密事項にも詳しいようだな」名波は楽しそうに言う、視線を横に動かした。

格納庫の奥まったところには、階段かエレベーターが設置されているのか、何かの出入口のようにステンレスで箱のように囲われている一角があった。頑丈そうな扉の傍らには、セキュリティレベルが高いことを示すオレンジのマークが貼られていた。

「赤いのは地下にしまっておりある」名波は地面を指差した。「どうやっても動かないから、僕がここに赴任して来るまで、ずっと放りっぱなしになっていたんだよ。珍しい機体だから、一応は、大切に扱われているのさ」

名波は俺を扉の方に促しながら言った。

「今、人類はピンチなんだ。僕には、あの変わった機体が、アンノ

ーンとの戦争の行方を左右するもののように思えてしょうがないのさ」

赤い憑代は、ただっ広い地下格納庫の中央に鎮座していた。

その回りには、何台もパソコンが乗ったデスクや何かの計測器具などが乱雑に置かれていた。

一見して俺は、その機体に言いようのない嫌悪感を覚えた。

赤い機体の色合いが、鮮やかな発色のものではなく、血のような暗い色だったせいかもしれない。通常、憑代とは、後部のデザインが異なり、大きく膨らんだ部分がグロテスクなシロアリの女王の腹部を連想させたせいかもしれない。

「実は、数日前に、これが動いた」名波が言った。

「動いた？」

「ああ。いきなり、勝手に宙に浮いたのさ」

名波はパソコンを起動させ、素早くキーを叩いた。

やがてモニター画面上には、白衣姿の連中が茫然と見守る中、青白く発光し、ケーブル類を引きずりながら、１メートル程の高さに浮かびあがる赤い憑代の動画が映し出された。

「ちょうど福本中尉がアンノーンと戦っていた時だ。実際に動いたのは、わずか１０秒程度だったけれどね」

「動いて、何があったんですか？」

「何もないのさ。起動して、すぐに沈黙した。僕としては、一度も動いたことがないものが、どうして急に動いたのか、その理由を突き止めたんだよ」

「名波教授は、どうしてこれが戦争の行方を左右するものだと思うているんですか？」

「この機体は、通常の憑代と似ているように見えるけれど、実際は何もかもが違う。放射性同位体測定では、この機体はおよそ１万年前以上も前のもので、通常の憑代よりも、ずっと古いものらしい。最近突き止めたんだが、起動はしていないものの、ナノレベルでは、

ごくわずかな活動が見られるんだ。もつとも、その活動の意味については、まったくの不明なんだけどね」名波はそう言ってペットを撫でるように赤い機体に触れた。

「我々はオリジナルの憑代から、なんとかコピーを製造することに成功した。まあ、いまだコピーできない技術も多いし、性能的にはかなり劣る機体だけれどね。それと同じようなことが、こいつにもあてはまる様な気がしているんだよ。真正正銘のオリジナルこそ、この赤い機体で、あとはすべてコピーなのかもしれないってね。そうだとすれば、この機体の中には、憑代をさらに超える未知のテクノロジーがぎゅぎゅ詰まっているはずなんだ」

「……教授は、誰が、何の目的で、憑代を残していったと思いますか？」俺は訊ねた。

「答えが見つからない質問かい？」名波は困ったような笑みを見せた。「アンノーンに敵対する文明であることは間違いないだろうけど、それ以外のことは、誰にも正確なことはわからないさ。しかし

……」

名波は何か言いかけて、俺の顔をじっと見つめた。

「トップシークレットだが、君も当事者なのだから、教えてあげてもいいだろう。五芒星の形をしたアンノーンは完全に破壊されたのではない。活動状態のまま、我々に捕獲されたんだよ。あれは紛れもなく、人類が初めて捕獲に成功した頭脳階級の使役物だ。深宇宙のどこかに隠れているＡＩが直接的にコントロールしているものなんだよ。意志を交わし合う方法が見つかれば、色んな答えが見えるかもしれないんだ」

「あのアンノーンが、この研究所にあるんですか？」ぞつとするような感覚とともに、俺の腕の肌が粟立った。

「残念なことに、ここにはいないんだ。捕獲されたその日に、月面にある軍の研究施設に持ち運ばれてしまったよ」

俺は安堵のため息をついた。あれは本当に、何があっても近くに置いておいてはいけない、危険な代物に思えたのだった。

「実は今日の午後から、お偉いさん連中にすべての状況を説明しなければならぬ。既に君にも出席してもらったことも決まっている。その前に、こうやって君と話をしておきたかったんだ。会議が長くなりそうだし、ことによっては君に嫌われてしまいかもしれないからね」

俺は名波の言葉の意味がわからなかったものの、その理由を問いかけてようとはしなかった。これ以上話をするよりも、早くここを出てしまいたかったのだ。

「ところで君は、あの赤い機体に何か見覚えがないかい？」

「ないです」俺は即座に否定した。

「本当に？」

「はい」

「ふうむ、やっぱりそうか」名波は軽くため息をついた。

そんなことがある訳がなかった。しかし俺は、失われて手が届かない記憶のどこかに、あの機体の色に反応してしまう部分があるような、どこか落ち着きのなさを覚えていた。

午後は、実験棟にある会議室に連行された。

巨大なモニターをU字型に机が囲むように配置されていて、モニターの真正面となる位置には、驚いたことに俺の父親が座っていた。父は俺に気付くと、軽くうなずき、目配せをしてきた。隣には、大佐の肩章つけた白髪で？身の人物が座っていた。片方のモニターに近いところには、クリス少尉とノア少尉をはじめ、制服姿の連中が、その反対側には、名波教授や、白衣姿の連中がずらりと並んでいた。俺は円卓のような机ではなく、離れた壁際にポツンと置かれた椅子に座らされた。両隣りには、屈強な兵隊が立ち、胸の前でライフル銃を構えた。

やがて大佐が立ち上がり、よく通る声で喋り始めた。

「宇宙空軍情報統制局大佐、森保である。この場所が軍の施設ではない関係上、宣誓などの面倒な手続は省くが、これからここで語ら

れることは、すべてSランクの重要機密事項に属する。諸君には、Sランクという意味を重々心得てもらいたい。何かあった場合、軍事法廷は開かれない。即刻、私の権限で裁く」

気がつく、向こう側の壁際には、ライフル銃を装備した兵隊がメートル間隔で並んでいた。明らかに部屋の空気が張り詰めていた。

「まずは5月25日、静岡県御前岬で発生した事象を、極力、各種記録データを元に、忠実に辿ってみたいと思います」モニターの横に立った名波が語った。

「操縦者は福本紫織少尉。ATGコードはレベル7です」モニター画面には、紫織の姿が浮かび上がり、入隊間もない初々しい姿や、憑代の前で勇ましく敬礼している姿に切り替わった。

「20XX年、12歳で宇宙空軍に入隊。500近い出撃回数を誇る空軍のエースパイロットです。エウロパ奪還作戦、冥王星爆撃作戦などの困難な任務にも従事し、めざましい戦果を挙げています」

再び映像が切り替わり、今度はスキャン画像など様々な医療データが浮かび上がった。

「昨年1月の検診によって複数の癌の発症を確認、余命はおよそ1年と診断されました。同時に無制限搭乗を申請し、速やかに受理されています。本年5月20日をもって一時的に軍務を離れ、当技術開発部に研究員補佐として赴任しました。付加しておくとなれば、ここ数ヶ月は自暴自棄な言動や行動が目立ち、所属部隊で孤立していたことでしょうか。隊内で何度も勧められていたようですが、向精神薬の処方やカウンセリング的なケアは一切受けていません」

画面が急に俺に代に切り替わった。

「同乗者は、岩本明、16歳。ここに連行しております。当研究所付属の公立学校に通う学生です。偏差成績は常に全国上位3%以内と非常に優秀ですが、ATGコードはレベル1未満、予備隊にも所属しておりません」

次に、思い出したくもないニュース映像に切り替わった。手ぶれ

で揺れる画面の中で、街が燃え、人々が逃げまどっていた。

「今回の事象と何か関わりがあると疑われるものに、10歳の頃の出来事があります。木星侵攻の成功によってアンノーンの襲来が途絶えていた中、深海で機能停止していたと思われるSMF急襲型タイプ03が急遽目覚め、関東地方を襲撃した事件です。この時、彼は目の前で母親を殺害され、本人も頭部に全治6ヶ月の大怪我を負っています。この後遺症によって、彼は重度の記憶障害を発症、幼少頃の記憶を、いまだに取り戻していません。性格傾向はS3-B4F5。一見、安定しているように見えますが、現実と自己への強い否定感が垣間見えます」

名波は父の方を向いて言った。

「岩本教授、ご子息については、この位でよろしいでしょうか？」

「ああ、問題ない。続けてくれたまえ」

「機体コードはOZR-3301。17年前、アイスランドで発見されたオリジナルの機体で、少尉に1年前から託されています」

画面にコクピット正面からの眺望が映し出された。ピンクや紫の色合いが混じった夕焼けの空が両側に流れて行った。その画面の両端に、俺と紫織の生体データが同時表示された。データは細かく、意味がわからないものが多くあった。

「福本中尉と岩本明の間で共感や親しみを意味するPSS値が高いのは、この数10分前に2人が性交渉を持ったためだと思われます」名波があっさりと言った。

俺は円卓に目を向けてみたけれど、誰も俺を見ていなかった。ここでは、そんなことは大した問題ではないのだろう。

「午後3時48分、アンノーンと遭遇。ここからは、私の言葉よりも、モニターをそのままご覧になってもらったほうがよいでしょう」

画面には、あのせまいコクピットの中にいくつカメラが取り付けられていたのか、紫織が俺に覚悟を促す場面まで撮影されていた。それ以後は、全力でアンノーンを振り切ろうとする憑代の姿だけが映し出された。

網の目のようないかずちをかわす段階に入ると、激しいGのせいなのか、ぎざぎざに瞬くようなノイズが混じるようになった。画面は上下左右がまったく変わらなくなる程、激しく切り替わった。白衣の連中は目を逸らしたり、瞬きを繰り返していた。

「そこで一旦、モニタを止めて欲しい」俺の父が手をあげて発言をし、画面が静止した。

「少しパイロットに意見を聞きいてみたい。君達は、福本中尉の操縦をどう思う？ あのように飛べる自信があるか？」

「私には、不可能です」クリスが少し悔しさを滲ませながら答えた。「私にも不可能です」ノアが答えた。

「秋元教授、君は最大戦闘速度下を想定した搭乗実験を繰り返していたと思うが、普通、一般人があのような状況に置かれた場合、どうなると思う？」

「10秒ももたずに意識を失うはずですよ。鍛えられていない三半規管ではあの激しい挙動には耐えられません」背が高い白衣の女がすらすらと答えた。

「では名波教授、岩本明がまったく落ち着いていられる理由をどう分析する？ 生体データを見てみると、彼は、福本中尉以上に、恐怖という感情を抱いていないようだ」

「不明です。所属する学校から岩本明のパーソナルデータをすべて取りよせてみましたが、答えになりそうなものは見つかりませんでした。確かに運動能力は高い数値を示していましたが、特に体操部などに所属している訳でもありません。強いて推測すれば、幼い頃に負った頭部の怪我によって、恐怖感などを覚える脳の扁桃体がダメージを負っている可能性があげられますが……」

しばらく考えた後に父が言った。「……なるほど、了解した」

名波は、その言葉に戸惑ったような表情を浮かべた。

モニターに映し出される映像で、あの時、紫織の憑代は、アンノーンに撃墜された後、きりもみ状態のまま砂浜に叩きつけられ、

土砂を巻き上げながら何度も高くバウンドしてから制止したことがわかった。

「ここからが問題の部分になります」名波が言った。

紫織を起こそうとする俺と、ぐったりとしたままの紫織。そして頭上に迫る五芒星のアンノーンと、機体に巻き付く節足動物のような物体。コクピットに何かが侵入してきた時、唐突にモニターがブラックアウトした。

すぐにモニターが遠くからコクピット全体を映すカメラに切り替わった。デジタルノイズが酷く、俺と紫織の姿がぼやけて見えた。「やめろ」と叫ぶ俺の声が微かに聞こえた。

すぐに紫織の生体データが赤く瞬き、警告を伝えた。彼女の首筋に何かが打ち込まれた瞬間だった。すぐに俺の生体データも赤く瞬いた。すべての数値が狂ったように踊ったと思った瞬間、紫織のデータも、俺のデータも、みなゼロを表示していた。

ノイズの向こう側で誰かが絶叫していた。

気がふれたような憤怒の叫びだった。ぐったりとした紫織の身体を後ろから抱きしめ、何かの獣のように叫んでいるのは、どうやら俺のようだった。しかし、その叫び声は、あまりにも暴力的で禍々しく、人間の発声器官が作り出せる音声の類だとは思えなかった。コクピット内で何かが瞬いた。同時に画面のノイズが激しさを増し、音声とともに沈黙した。

「先程の瞬きがあった場面で、コクピット内に侵入していたアンノーンの触手が破壊されています」

画面ではCGによる再現が繰り返されていた。

あの瞬きの正体は、コクピット内数力所から発射された光線であることがわかった。

「この光線については一切が不明です。誰かの命令で発射されたものなのか、それとも憑代が備えていた自動反応型の防御システムだったのか、何一つ解明できていません。ただ、あのアンノーンの一部とは言えども、一瞬で破壊できる兵器が発現した例はこれが初め

てです」

はじめて円卓がざわついた。軍服の連中が興奮した様子で声をあげていた。

「その光線はどうやれば再現できる？」「あの兵器があれば戦局が一変するはずだ」

「残念ですが、この光線については本当に何もわかっていません。ムーンベースの方でも、早速、この光線の再現実験を繰り返しているはずですので、近いうちに何らかの成果があるかもしれません」名波がなだめるように言った。

「実は、この同時刻に当研究所で奇妙な現象が観察されました。赤い憑代です」

画面には赤い機体の憑代が映し出された。

「この憑代に機体コードはありません。通常の憑代とは著しく外觀が異なり、付着していた土砂の放射性同位体測定では、憑代をはるかに上回る、一万年以上も以前に建造されたものだと考えられます。この機体については、今まで起動した例がまったくなく、すべてが不明でした」

映像が切り替わり、名波に見せられた赤い憑代が起動する場面が映し出された。

「それが、今回の事象と同時刻の午後4時03分に無人の状態で起動しました。二つの出来事的时间軸を合わせ、モニターに並べてみました」

画面には、赤い憑代の起動シーンと、コクピット内の映像が二分割同時に映し出された。

赤い憑代が起動したのは、俺が何事かを叫びだした時刻とぴつたりと重なっていた。

「なお、先ほどの叫び声は、声紋から岩本明のものであることが確認されています」名波が念を押すように言った。

円卓に並んだ連中が、初めて俺に怯えたような視線を向けた。

「ここから先の出来事を福本中尉の機体は記録していません。この

後は、杉田少尉が記録していた映像に切り替わります」名波が言った。

「福本中尉、応答せよ」

モニターにはオレンジに染まった夕景が映し出された。紫織の機体は海岸にのめり込んでいた。その真上には五芒星の姿があった。

「あれが福本機なのか？ どういうことだ？ こちらからは、変形しているように見えるぞ」ノアが言った。「変形だと？ ……確かに、何かが突きだしているように見えるが……」クリスの声がコクピットに響いた。

ズームになった紫織の憑代が姿を変えようとしていた。セミのような後方部分が溶け出すのと同時に、機体の両側から、植物が成長する様子を微速度で撮影再生したように、鋭いものが伸び出していた。

五芒星が急上昇し、その中心が瞬いた。いかずちが憑代に向かって撃ち出された。

しかし、その光線は憑代に届かなかった。憑代が何かの障壁を発生させているのか、機体の直前で光の帯はすべてかき消えた。

「どういうことだ？ なぜあの光線を打ち消すことができたのだ？」
「わからない。杉田少尉、注意するのだ。ここでは、何もかもおかしく感じられる」

カメラに捉えられた機体からは、今や憑代の全長をはるかに超える、わずかに湾曲した鉤爪のようなものが突きだしていた。

いきなり地面が爆発したように見えた。そこから憑代が消えていた。

紫織の機体を追いかけるカメラが前後左右に動き、五芒星の上空でぴたりと静止する憑代の姿を見つけ出した。

「瞬間移動なのか？ あんな挙動がどうしてできるのだ？」クリスが信じられないように言った。

紫織の機体が横に回転を始めたと思った瞬間、再びかき消えるよ

うな機動を見せ、一瞬でアンノーンを貫いた。五芒星の中心近くに巨大な穴があいていた。

五芒星は戸惑ったように上空へと飛翔した。再び、紫織の機体がきらめき、巨大な図体を貫いた。

「馬鹿な。あの五芒星のシールドはノーマル状態の憑代をまったく寄せつけないはずだ。こんな戦い方がるものか！」何かを恐れるようなクリスの声が響いた。

それは処刑のようにも見えた。変形した憑代は、何度も五芒星に穴を穿った。

いまやアンノーンは五芒星の形状を保っていなかった。引き裂かれた部分から、何かが地面へと落下し続けていた。

突然、アンノーンが動きを静止させ、そのまま砂浜に落下した。少し遅れて土砂が空高くわき上がった。

「倒したのか？ たった一機で？」戸惑うようなクリスが声が聞こえた。

紫織の機体は、空に静止したまま、微動だにしなかった。

「福本中尉、無事か？ 返答せよ」ノアが呼びかけていた。

遠くに見える変形した機体がゆらりと杉田の方向へ鼻先を向けた。

「杉田少尉、注意しろ！」クリスが鋭く警告を発した。

カメラの中から、紫織の機体が消えた。その瞬間、杉田機が急旋回し、側面を横切っていくものを避けた。どこかわずかにかすったのか、カメラが小刻みに揺れた。

「危なかった！」ノアが叫んだ。

「紫織、やめろ！」クリスが大声で叫んでいた。

紫織の機体は、その言葉が聞こえたのか、旋回中に戸惑うように急に停止した。そして突然、つり下げられていた糸が切れたかのように、急に力をなくし、真下に落ちていった。

「コクピットの中で何が起きたのか？」「誰が憑代を動かしていたのか？」「なぜ憑代が変形したのか？」

俺はあの後、円卓の真ん中に引き立てられ、両側の軍服連中と科学者連中から質問攻めにされた。

俺に答えられる質問など一つもなかった。何も覚えていないのだから仕方がなかった。何度も同じ答えを繰り返す俺に、連中も諦めがついたのか、俺は途中で退席させられた。

二時間近く、別室で監禁状態にされていると、俺の父親と名波が揃ってやって来た。

「今回のことは、災難だったようだな」

俺はまるで他人事のような父の物言いに強い違和感を覚えた。

「私はすぐにムーンスペースに戻らなければならない。おまえのことはすべて名波教授に任せてある。心配する必要はない。きちんと調査には協力すればいいだけのことだ。少し落ち着いたら、お互い、連絡を取り合うようにしよう」父はそれだけ言い終えると、名波の方を向き、「後は頼む」と伝えて部屋を出ようとした。

「待って下さい」俺は父を呼び止めた。

「何だ？」

「ここにある赤い機体は、俺に、何か関係があるんですか？」

「どういう意味だ？」

「……うまくは言えないんですけど、何か、とても嫌な感じがしたんです」

「嫌な？」父は俺の言葉に考え込むように腕を組んだ。

「今日の会議の前、時間があつたので、私が独断で赤い憑代を見せています」名波が弁解するように言った。

父はうなずき、「君の行動は、私も科学者だから理解できる。疑問に思ったら、後先考えずに突っ走るのが僕らの性だろうからな。一つも責められないさ。どんどんやればいい」

「お心遣いをいただき、恐縮です」

「お前は赤い機体など見ていないさ。あれが私の研究対象だったのなら、何かの拍子にお前の目に入ったかもしれないが、そういう過去はまったくないのだ」

父はため息をついた。「もしも、どこかで見たような覚えがあるのなら、それは記憶をなくしたことによる混乱だろう。おまえには、見ず知らずの他人に奇妙な親近感を覚えたり、初めて訪れる場所に妙な懐かしさを覚えたり、そのような経験が少なくないと思うが、どうだ？」

確か俺の記憶は混乱してしまうことがあった。俺はそれ以上何も言えず、部屋を出て行く父を見送った。

名波からは、すべての検証が終わるまで、学校に通う傍ら、毎日研究室に出頭するように命じられた。俺も実験が何かに参加させられるのだという。

「君が追い出された後、議論が紛糾してね。軍服の連中はあせっているんだよ。現れる敵が手強くなる一方だからね。それにしても、今回の事象は解明できないことが多すぎる。憑代が暴走した可能性もあるし、君と福本中尉が同乗していたことが影響しているのかもしれないし、他に何か原因があるのかもしれない。でも、一つ確かに言えることは、あの場には、憑代が今以上に強力な兵器になれるヒントのような現象が含まれていたことなんだ。僕は人類のためにそれを解明したいんだよ。だから君にも協力して欲しいんだ。A T Gコードのレベルに関係なく、君が鍵になっているようだからね」

その日の夕方、やっと俺は寮に帰ることが許された。

部屋のドアを開けると、ユウイチが幽霊でも見るような目で俺を迎えた。

マナにつき合って病院の受け付けに通っていた際、そこで出会ったノアと結構親しくなったらしく、俺が二度と学校に戻れないことを、それとなく伝えられていたのだという。実際、あの会議の最中、ずっと兵隊に警戒されていたことを振り返ってみれば、そうになっていた可能性の方がずっと高いようにも思えた。

いきなりノックもなく部屋のドアが開け放たれた。

マナが俺の胸に飛び込んできた。彼女は泣きじゃくっていた。

「少し、時間をつぶしてくるから、再会の喜びを存分に味わってくれ給え」ユウイチはそう言って部屋を出て行った。

俺はマナを抱きしめた。

彼女は何かを思い出したように身体を離し、心配そうな様子で俺の身体に目をやった。

「体は大丈夫なの？ 怪我をしたんでしょ？」

「あいつら、大袈裟なんだよ。大したことなんてなかったんだ」

病院を出て行く際、俺は目の前に立ち塞がった仏頂面の大尉に、友人達には運動テストの最中に事故に遭ったと話すよう厳命された。事実を誰かに打ち明けたりすれば、話を聞いた方も厳しい監視下に置かれることを警告されていた。

「何度も病院に行ったのに、大怪我で面会できないって言われたんだよ？ 本当に大丈夫なの？」

俺は彼女を抱きしめながらうなずいた。

こんなにも俺のことを気遣ってくれるやさしいマナに、俺はとびつきり残酷なことをするのだ。彼女には何の落ち度もなかった。告げなければならぬことを思うと、どうしても胸が痛んだ。

俺は寮に戻る前に、紫織を見舞った。彼女はもう少し自由に動けるようになったら、放射線などの設備が整っている都内の総合病院に移ると言った。俺はその病院名を教えてもらい、彼女の手を握った。

女子寮の門限が迫っていた。もうマナは自分の部屋に帰らなければならぬはずだった。

俺は、時間がないことを理由に、先延ばしできることにホツとしていた。

翌日、二時間目の授業中に、俺は名波に呼び出された。

彼の研究室を訊ねてみると、俺はあの会議にも参加していた秋元

という教授に紹介された。

「彼女に君の身体を徹底的に調べてもらおうと思っただけ」名波が機嫌の良さそうな笑みを浮かべて言った。「君のお父さんから、そうしろって命じられたような気がするのさ」

秋本教授は糊のきいた白衣の襟元に、紺のピンストライプが入ったワイシャツを見せていた。年の頃は、名波と同じく30前後だろう。少しきつ目の顔立ちのせいかな、やたら口うるさい生活指導の教師なんかが似合うと思った。

「君が岩本明君ね。コクピットでの叫び声はセクシーだったわよ。私、ワイルド系の男の子が大好きなの」彼女は俺をゆっくりと眺め回しながら言った。

俺はその場でワイシャツを脱ぐように命じられ、小型の心電図のようなものを取り付けられた。今日の昼から数日の間、緻密な検査のために指定された医療用食品だけを口にしなければならず、俺は食品パックが沢山入った紙袋を手渡された。

「アキラには彼女がいるんでしょ？ クリスが教えてくれたわ」

「別れるつもりだよ。それが何か関係あるかな？」俺は肩をすくめて、ベットサイドのパイプ椅子に腰をおろした。この頃になると、俺は紫織に対して敬語を崩していた。

「関係あるわ。私、嫌なの。私のことだけを一途に思ってくれる人じゃないとね」

「こっちは、もう紫織のことしか想っていないんだけどな」

「ねえ、私に同情しているの？」

「同情なんかじゃないさ」

「じゃあ、ちゃんと説明して」

「あえて言えば、憧れとか、シンパシーとかに近いのかな」

「なにそれ？」紫織が面白そうに訊ねた。

「俺がもしも憑代に乗れたとしたら、紫織みたいに、生きている限りは最後まで乗っていたかったって思うはずなんだ。まあ、こっち

の場合は、世の中のためっていうよりも、面倒臭いことを一気に終わらせたっていう自分勝手な理由なんだけどさ。でも、それだけだと、いくらなんでもさみし過ぎるから、最後位は、やさしい誰かについていて欲しいって願うと思うんだよ。紫織だって、そんな風に思っているんじゃないかな？」

彼女は何も答えず、ここに来るようにと、自分の隣あたりのベツトシートを軽く叩いた。

俺はベツトに腰かけ、紫織にキスをした。

「私について来るなんて、本当にそんなことが出来るの？」

「できるさ。16歳からは学校を辞めるのも、どこかに転校するのも、こっちの自由なんだから。それに、うちの学校はモルモットになる代わりに、ちゃんとバイト代を出してくれるんだ。引越した位は貯まっているよ」

紫織はもたれかかるように俺に身体をあずけてきた。

「実家に帰ろうかなって、迷っているの」

俺は彼女の肩を軽く抱いた。

「私のATGコードがレベル7だってわかった時、家の前にテレビ局や新聞社が沢山やって来て大騒ぎになったのよ。私が史上3人目のレベル7だったらしいわ。全然知らない人まで私の手を握っておめでとうって言うのよ。最初は、みんながどうしてそんなに喜んでいいのか、訳がわからなかったわ。私のお父さんなんか、テストを受ける前は、『小さい頃から臆病で泣き虫だったおまえが宇宙空軍の一員になど選ばれる訳がない、絶対に無理だ』って言っていたのよ。それが急に、『私もお母さんもおまえのことを誇りに思っている。世界のために頑張って来い』って真逆のことを言いだすし……、もうその頃には、私も覚悟を決めていたわ」

俺は会議室のモニターに映し出された、入隊直後の初々しい彼女の凛々しい姿を思い出した。

「でも、新兵訓練が終わった頃にお父さんから手紙が届いたの。『私が間違っていた。紫織は頑張らなくていい。無理をするな、生き

て帰れ』ってね。あの時は、やる気に満ちていたから気にも留めなかったし、手紙もすぐに捨ててしまったけれど、今は、その言葉を思い出してばかりいるのよ」

紫織の肩が小刻みに揺れ始めた。

「私、こんな姿を見せたくないの」紫織の言葉は涙に飲み込まれた。

俺は彼女を抱きしめた。

紫織は嗚咽を漏らし続けた。

これ以上つき合えなくなったことを打ち明けると、マナは何度も「どうしてなの？」と繰り返し、最後に俺の頬を思いつき叩いた。そして切れ長の瞳に涙をたくわえ、唇をふるわせながら、俺を「裏切りもの」と罵った。

場所が放課後直後の下駄箱間近だったため、俺達は結構目立ってしまった。廊下を歩いていたら連中から会話が消えていた。

俺はうつむくマナから離れ、自分の部屋に帰った。

秋本教授の元へ顔を出すため私服に着替えていると、ユウイチが黙り込んだまま帰ってきた。俺に向けた瞳には、明らかに非難や怒りが含まれていた。

「どういふつもりなんだよ？おまえ、マナちゃんに、他に好きな女ができたって、本当に言ったのか？」

俺はユウイチにうなずいた。

「相手が福本中尉って、マジなのかよ？」

「ああ。おまえに隠していた訳じゃないんだけど、なんかうまく伝えられるタイミングがなくてさ」

俺は、紫織にあまり余命が残されていないことは伏せ、学校を辞めるつもりでいることや、彼女の故郷に行ってみようと思っていることを打ち明けた。

「訳がわかんねえよ。だって、福本中尉って、この前知り合ったばかりだろ？それがどうして、田舎までついていくって話になってい

るんだよ？ 学校辞めるってどういうことだよ？」

「まあ、色々と事情があるんだよ」

「……おまえってさあ、結局、そういう奴なんだよな」ユウイチが深いため息をついた。「結局、ちよつと入り組んだところは何一つ見せようとしなないから、何年もルームメイトやってたって、訳がわかんないまんまなんだよ。もう一人で勝手にやりやいいじゃん」

部屋を出ていこうとすると、後ろからユウイチが呼び止めた。

「俺がマナちゃんに告ってうまくいっても、ぐちゃぐちゃ文句言くなよ？」

俺は肩をすくめ、そのまま部屋の扉を閉めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5637v/>

飛翔兵器 憑代

2011年8月12日03時19分発行